

研究結果として、NICU 看護師の子ども虐待予防を目指した親子関係形成に関する思考は、「親子関係形成の支援に関すること」と「親子関係形成の観察に関すること」の2つのコアカテゴリに分類された。(以下、カテゴリを< >で示す)

「親子関係形成の支援に関すること」は、NICU 看護師がその支援において実施していることや実施しようとしていることなどについて語られていると判断したものである。最も多く語られたことは<親子のふれあい>であり、看護師は、<子どもに触れることを勧める>ことをしていた。また、親が子どもを理解し、関わり合いが持てるように<子どもに関する情報提供>をしていた。看護師は子どもの退院後に目を向け、<施設内のチームの連携>を図り、情報収集や引き継ぎを行い、<退院に向けた準備>として親が育児援助技術に自信が持てるように関わること、子ども虐待につながる不安を感じる親には、とくに<気がかりな親への対応>として地域の保健師を中心とした専門職と連携を図れるように連絡していた。また、看護師は親の思いを知りたいと思考し、<親の思いを知るための情報収集>をしながら<親と看護師の関係構築>に務めていた。他に、<看護師自身の出産・育児の経験>を活かしたいことや<退院後の生活の様子の確認>をしたいが難しいことが語られていた。

「親子関係形成の観察に関すること」は、NICU 看護師が親子関係形成の支援において面会を中心とした親を観察していることなどについて語られていると判断したものである。最も多く語られたことは<気がかりな親>のことであり、<面会の回数><面会の状況><面会中の観察点>として親の様子を観察し、子ども虐待につながることを観察していた。また親を見て<親の印象>を感じ取り、<親の気持ち>を推測していた。そして、こうした観察を通しての思考を活かしながら支援を行っていた。

以上の結果より、NICU 看護師は日常の仕事の中で、親子関係形成に向けての支援を共通して持っていることが認められた。この支援の実際としては、面会時間を重要なものであると価値付け、親を観察し、子どものことを理解できるような説明をして、親子がふれあえるように勧めていた。本研究の対象とした各施設の事例は、親子関係に影響を及ぼす環境事情がないと考えられた子どもを選定しているにもかかわらず、看護師は親の気がかりな点を観察し、対応しており、子ども虐待の恐れを意識していることが明らかとなった。

上記研究は、NICU 現場の看護師の自由な語りを通して、その思いを整理し分析するという方法で、NICU 入院を必要とする新生児の看護、親子関係の確立を目指した支援のあり方を示し、チーム医療の重要性、臨床心理士配置の要望、地域における保健師等の専門職との連携、さらに児童虐待予防を念頭に置いた今後の看護教育と新任看護師の研修のあり方について提言している。なお、本論文においては、上述の研究内容の記述に先立って、児童虐待問題の内外の事情と研究の現状、新生児の親子関係の形成に関する研究、低出生体重児の場合のリスク等について文献的考察を行っている。

【論文審査の結果の要旨】

学位申請者安藤晴美は医科大学の看護学科において小児看護の教職にあり、児童虐待の予防、親子関係の形成支援に熱意を持って本研究を行っている。低出生体重児等で NICU 入院を要し、長期間に亘り親子の接触のできなかつた子どもに被虐待のリスクのあることが知られ、その対策が求められてきている現在、本研究は NICU 現場で働く経験を積んだ

看護師の生の声を通して、親子関係成立への支援のあり方を具体的に取りまとめ、今後の看護学生への教育、新任看護師への研修のあり方について提言した。

このような手法で、親子関係の形成支援と虐待予防に結びつくハイリスク新生児のケアのあり方を追求した研究はこれまでにない。また、NICU 入院児と被虐待との関連は、問題となってから日が浅く、その対応を看護師教育の立場から検討し、提言を行った研究は、児童虐待問題に早くに気づいた欧米でも数少ない。

本研究は、わが国の今後の児童虐待予防に向けた、保健福祉・医療・教育の分野で極めて有意義である。

以上により、論文審査および最終試験の結果に基づき、審査委員会において慎重に審査した結果、本論文が博士（保健福祉学）の学位に十分値するものであると判断した。